

俳人 成田千空研究会

千空研究

第18号

さなぶりの川ゆつくりと日が暮れる

—千空句版画—

藤田 健次



この句を書いた色紙を大切に持っている。もちろん、千空さんの直筆である。この句を拝見するたびに、私はいつも自分のふるさとである鶴田町を思い出す。鶴田町を流れる、夕暮れ時の、あの水量豊かな岩木川が目の前に広がるのである。左には夕闇に包まれてゆく岩木山、右には鶴寿橋。私は、一年のうちで、さなぶりのころの、いつまでも暮れようとしめない黄昏どきが一番好きだ。そんな鶴田町の岩木川をイメージして彫ってみた。第3句集『天門』から。

(版画家・会員／八戸市)

目次

さなぶりの川ゆつくりと日が暮れる	藤田 健次	1
—千空句版画—		
〈回想の成田千空〉		
千空さん「津軽のふるさと」を歌う	木村 直美	2
千空先生に俳句を習う⑤	世良 啓	3
うつくしいことば		
〈作品鑑賞を読む〉		
⑩ 菜の花の地平や父の肩車	清水 哲男	4
新資料とともに①		
五所川原の千空句碑	齋藤 美穂	5
〈成田千空資料再録〉⑩		
私の中の戦争		
千空 酒の俳句		7
陸奥新報が「社説」で論評		10
『成田千空伝』『合本成田千空句集』		11
寄贈感謝・会員名簿・北極星		12

千空研究会の事業

- ① 詳細な年譜の作成
- ② 千空俳句データベースの作成
- ③ 関係資料の収集
- ④ 関係者からの聞き取り
- ⑤ 会報『千空研究』の発行
- ⑥ 『評伝 成田千空』の刊行
- ⑦ 『合本 成田千空句集』の刊行

回想の成田千空

千空さん「津軽のふるさと」を歌う

木村直美

忘れることの出来ない手の温もりでした。千空さんは低音ながらよく通る声で「津軽のふるさと」を最後まで歌いきったのです。私が独唱を終えると舞台上に駆け上がり、会場に流れる余韻を掻き立ててくださったのです。「ああ 津軽の海よ 山よ いつの日もなつかしい 津軽のふるさと」(作詞・作曲 米山正夫)の歌詞は、ふるさとの大地を踏みしめながら俳句に専念された千空さんの想いの全てだったのでないか、その時に納得したのです。これは成田千空さんの句集「忘年」出版祝賀会が開催された平成12年5月15日、弘前市内の当時のシティ弘前ホテルでの思い出です。

「忘年」の出版祝賀会の2カ月前でしようか。此岸俳句会の泉風信子代表から電話がありました。「千空さんが美空ひばりの歌った「津軽のふるさと」を祝賀会で是非聴きたいらしい。そして歌いたいのではないか。何んとか出来ないか」。当時、NHKテレビは朝の連続ドラマで下北・大間を舞台にした田畑智子主演の「私の青空」を放映中でした。子連れのヤングママの「肝っ玉奮闘記」で、その娘を心配するマグロ漁師の父親辰男(伊東四朗)が呟くように口ずさんでいたのが「津軽のふるさと」だったので。

早速、NHK弘前支局に問い合わせさせて楽譜を取

り寄せました。音楽仲間の工藤康江さんをお願いしてピアノ伴奏譜に手書きして作り直してもらい練習に入ったのです。私は「詩織」の俳号で此岸俳句会に入ってもまもなくの頃でした。出版祝賀会の当日は、錚々たる顔ぶれの俳人の前で歌うのですから緊張しきりでした。

句集「忘年」は萬緑選者として活躍する千空さんの5冊めの句集で、県内外から結社同人や俳句仲間120人が集まっていました。祝辞には当時の県知事で俳人の木村守男さん、文芸評論家の小野正文さん、それに俳人の藤田枕流さんが登壇し



写真は筆者と成田千空さん(撮影者 平井さち子さん)

て「青森の風土を心豊かに詠みあげる姿に敬意を表したい」と激励。また萬緑の幹部同人の平井さち子さん、奈良文夫さん、萩原季葉さんは「千空俳句にはフリーズの美しさの中に真実が隠れている。ますます進め千空さん」とエールを送ったのです。傘寿を迎えた年でもあった千空さんは謝辞で「若い時は病身で30歳まで生きれば良いと思っ ていました。とうとう傘寿まで生きることが出来ました。そうなるに欲が出て来ます。これまでの私の俳句は大衆性、普遍性とは何かを追求してきましたが、これからは身を削るような苦しみをもう一度味わわねば駄目だと思っております。あと5年は生きるつもりです。…それに近頃は太り気味なのでその方も削る必要があるようで、よろしく願います」と、笑いを混じえて拍手に包まれました。千空さんの句集はこれまで、「人日」「地霊」「天門」「白光」の4冊があります。

千空さんご希望の「津軽のふるさと」は工藤康江さんピアノ伴奏で私の独唱が始まった時、千空さんは少年のように頬を紅潮させ、目を輝かせて舞台を見上げておられました。そして時々うなずき、その姿を隣席の市子夫人が笑顔で見つめておられたのが印象に残っております。私が歌い終わると、千空さんはしばし瞑目されておられたが、大きな拍手をされながら登壇、私に握手を求められました。私は思わず「千空先生、みなさんと一緒に歌いましょう」と勧めると、私と手をつないで「うん、うん幸せだなあ」と、よどみない調子で歌い始められたのです。テレビドラマの「私の青空」が「千空の青空」になった瞬間でした。

——その日から12年後の平成30年10月27日、県現代俳句協会の秋の吟行会で、五所川原を訪れま

した。千空さんを偲んだ多くの吟行句が作られました。その中で私は、会長選の人物になった

ひっそりと花やつで咲く千空家

尾野 久子

が印象的でした。また

千空と酌みたし新酒「やってまれ」

橋川まもる

師弟句碑程よき間合秋時雨

佐藤いく子

など、成田千空さんへの思いが秋雨を静かに深いものにしていたように思いました。

(きむら なおみ／弘前オペラ会会員・弘前ねむの会ファミリーコーラス顧問・此岸俳句会・陸同人・現代俳句協会会員／弘前市)

千空先生に俳句を習う⑤

うつくしいことば

世 良 啓

師弟碑建立の日の翌日、11月5日は弘前で「俳句入門」があった。宿題は紅葉一句と当季雑詠二句で、千空さんは「表現」についてお話しくださった。

「言いたいことや表現したいことというのは、より具体的な方がいいね。」

例えば『みちのく』というの、よい言葉ではあるが、このごろは安易に句に登場し、使われて

いる気がする。常套手段として、ありふれた言葉になってしまっている。

言いたいことは、強調しすぎると、かえってわからなくなる。特殊性には普遍性がないと言葉が生きないのだ。強調することを俳句の中で重ねすぎるとうるさくなる。だからインパクトを強めようとするのではなく、そのままに実景をとらえていくことが大切だ。私が若いときに作った句なんだけどね(と、黒板に句をひとつ書く)

埴色に枯れながらへて柏の葉は

四〇年も前の句なんだが、埴色はにいろというところに風土感があるわけで、この言葉がわいてきたところを「がつつ」とつかむんだ。つかんだら、もう離しちゃいけない。

それから、なるべく「うつくしい日本語」を使うことだね。略語などは便利なんだが、特に気をつけて扱わなくてはいけない。」

さて、この日の最高点は、千空さんの次の句だった。

木も草も水も紅葉の行方かな 千空

この俳句入門教室では千空さんも生徒たちと一緒に。まったく同じ立場で投げ出し、選句しあうので私たちにはどれが千空さんの俳句なのかはわからない。千空さんの句に一点も入らない日もあるが、それでもいつも自然で「ありゃ」とちょっと悔しがりつつも、こだわる風はまったく無かった。

じゃあ次回は「大根一切」、と最後に千空さんから宿題が出た。「生活感情とともに、どのような詩情、ポエジー、純粹感情が湧くのか、どう料理するのかが大事です」

次の11月19日も「俳句には、うつくしいことばを使いたい」と、しきりに仰っていた。美辞麗句とまではいかないで、しかし、うつくしいことばを使いたい、と。

その日、教室に入ってくるなり「みなさんは俳句は……書くといひますかね、つくると言ひますか」と、ひとり言のように問ひかけてきた。

「俳句は『書く』と言ってみたり、『作る』と言ってみたりするわけだけれど……、他にも例えば『吐く』とかね、『産む』とかね……、ああ『ひねる』という言い方もあるなあ。中村草田男は『吐く』というのをよく使いましたよ。」

やっぱり俳句は『吐く』とか『産む』とかだろうね。『作る』とか『ひねる』というのは、なんだか作爲的な気がしてね、やはり私も『吐く』こうでありたい。

『産む』もいいね。なるべく作爲を取り去って、自然に生まれてくるようなね……」

野坂十二楼句集稿

館田勝弘編

最新刊

青森文芸ブックレット

A5判、82ページ

定価一〇〇〇円

十税

青森文芸出版



野辺地町の俳人野坂十二楼の自筆句集原稿を影印版と活字で表す。明治期作品を纏めた県内最初の自選句集を、百年以上経ってここに公開。

時々沈黙しながら、千空さんは俳句の『誕生』について話し続けた。

「江戸時代の荻生徂徠という人が『まことその他に俳諧なし』と言っていますね。

自分の琴線にふれたものがいったい何であるのか……。

そしてそれは案外、ささやかな方が聞きやすいんです。

それから他の季語に置き換えることができる状態を『季語が動く』と言いますが、言葉と言葉が照応して、ぱーんと句が張ってできあがる。その言葉でなければならぬ。それを『一句立つ』とか『立て句』と言ったりしますね。」

12月3日の俳句入門では、「いい俳句をつくるには、いい人にならなくてはいけない、と言いますけど」と切り出した。

「俳句にはその人らしさが出るんです。乱暴な俳句や、ぶっきらぼうな俳句は、人がそのまま、俳句にもろに出ます。芭蕉も『俳諧は三尺の童にさせよ』と言ってますけれど、三尺っていえば、何歳ぐらいだろう。とにかく子どもっぽい感じの句、童心、小学5年生ぐらいかな、それがいい。

『我かくの如くものを見たり』それが俳句なんだ。その時にまず類想を避けること。省略と余韻を大切にすること。そして説明しすぎでないか、気をつけることだ。しゃべりすぎると効果がなくなるからね。

とにかく、いい俳句を作るには、ものをよく見る。ものを正確に表現する。本心を出す。それが大事なんです。

12月17日のノートには、「俳句とは関係のこと」
「実際にあったことがただの報告になるとつまらない」「雪は難しい。本当の雪を見てどう降ってくるのか描くことができたら作家になれると太宰が言っている」などのメモ書きがある。

この日は確か近くの「藤棚」という店で忘年会をしながらの句会だったと記憶している。千空さんが好きだという美空ひばりの歌「津軽のふるさと」を全員で歌ったりした。

千空さんは短冊を持ってきていて生徒一人一人のリクエストする句をその場で書いてプレゼントしてくれた。

「あなたは、どの句がいいの？」と聞かれて私は、どうしていいかわからず、「先生が私にいいなと思う句を……」と、言うのがやっとだった。千空さんにどんな句があるのかも、ろくに知らなかったのだ。しばらく考えてから千空さんはにこっと微笑み、筆を執り、さらさらと書いて渡してくださった。「あなたには、これ」と。

岩木嶺は大きく手毬歌やさし 千空

後になって、千空さんの第一句集『地霊』を買ったとき、ページを開いて最初にそこにこの句があったのを見つけて、胸が熱くなった。

初心。うたの始まり。

ふるさとの母なる山、その山に抱かれてうたう童女たちのやさしくあどけない手毬歌の景……。

この句は私にとっての一生の宝物、羅針盤となったのである。

(文筆家・高校教師／藤崎町)

【作品鑑賞を讀む】⑩

菜の花の地平や父の肩車

山村暮鳥の「いちめんのなのはな」はつとに有名だが、作者はそんな風景のなかにある。

幼かったころ、やはり「いちめんのなのはな」のなかで、父が肩車をしてくれたことを思いだしている。とんでもない高いところを上ったような気分で、怖くもあり嬉しくもあった。いま眼前の菜の花の様子は昔とはちっとも変わってはいないし、父のたくましい肩幅の広さも昔のままにちゃんと覚えている。こうやってあのころと同じように地平に目をやっていると、不意に父が現われて、また肩車をしてくれそうな感じがした。ここで父をしのぶ作者の心理的構造は、野球映画『フィールド・オブ・ドリームス』にも似て、「自然」に触発されている。母をしのぶというときに、多くは彼女の具体像からであるのに比べて、父親はやはり抽象的な存在なのだろう。肩車という行為自体が、非日常的なそれだ。しかりこうして、すべて男は対象が誰であれ、なんらかのメディアを通すことによってしか想起されない生き物であるようだ。男は、女のように「存在」できないらしいのである。

清水 哲男

(『俳句』平成9年6月号)

五所川原の千空句碑

齋藤 美穂

待ちに待った季節がめぐってきました。残雪をいただく岩木山をはるかに眺めながら、目指すは五所川原市立図書館です。途中、千空夫妻が住んだ家の前を通りがかり庭の辛夷や八重樫の美しさに足を止めました。西側の土手の向こうには雪解水を集めた岩木川、空に向かって伸びる枝々に開いた花のみずみずしさ。庭の手入れをする主の影がないばかりです。

図書館が建つ五所川原市菊ヶ丘運動公園の一角に、千空の代表句「大粒の雨ふる青田母のくに」が刻まれた句碑があります。1990(平成)二年六月九日、ここで千空句碑の除幕式が執り行われました。今回は新しい資料とともに、県内二基目となった千空句碑について記したいと思います。



11月14日、千空さんの命日には花束が

全国的な活動へ移行して

昭和から平成への改元の前後は千空の俳句人生にとって節目となるできごとが重なりました。昭和六十三年、千空は師・中村草田男の後継者として結社「萬緑」の選者に就任、翌年二月には第二句集『人日』で第二十八回俳人協会賞を受賞しました。東北の俳人・成田千空の名は全国に広まり、青森県の文化関係者らは喜びにわきました。八月、千空を師と仰ぐ深浦俳句会は、「行き合はん岬は草の花だたみ」の句碑を行合岬に建立しました(『千空研究』第一号の草野力丸「行合岬に句碑建立」に詳しい)。千空は同年十二月に青森県の各分野の貢献者に贈られる東奥賞を受賞。こうしたなかで五所川原での千空句碑建立の機運が高まっていったでしょう。平成二年六月六日の東奥日報には「成田千空さんの句碑、9日除幕」の記事が見えます。

五所川原市の俳人で「萬緑」選者、成田千空さんの句碑が同市菊ヶ丘公園に建立された。九日午後一時半から句碑前で除幕式が行われる。千空さんが県文化賞、東奥賞などを受賞したのをきっかけに、業績をたたえ後世に永く伝えようと建立した。俳句仲間の前田水馬さんら十人が発起人となり、市内外の俳句、短歌などの関係者から募金した。男鹿産の安山岩にインドの黒みかげ石をはめ込んだもので、高さは二・一メートル、幅一・四メートル、厚さ〇・六五メートル。句碑の表には千空さんが青森市から母の故郷・五所川原市飯詰に引き揚げてきた時に詠んだ「大粒の雨ふる青田母のくに」の句が刻まれ、本人が揮毫してい

る。裏側には、千空さんの歩みや業績を紹介した前田さんの撰文が、同市の書道家山上和美さんの筆で記された。

同年の千空の日記には句碑に関わるいくつかの記述が残されています。要点を書き出してみます。

一月四日 句碑「大粒の雨ふる青田母のくに」十枚書く。どれも満足できず。

二月四日 千空句碑発起人会。目標八十万円を超える。

二月十九日 句碑撰文を前田水馬が書きあぐんでいるので下書きを書いてやる。

三月三十一日 前田水馬より「千空句碑のその後はどうなっているのか」と言われ、敦賀晴川に電話で場所のことだけでも、と葉っぱをかける。

四月三日 三和篁村と寺田石材店へ行き、句碑のデザインを決める。

五月二十六日 句碑の工事を確認する。

六月九日 句碑除幕式。宮司の祝詞が名文。

六月十三日 RAB句会で深浦吟行。五所川原の句碑に立ち寄り、行合岬の句碑も廻る。

八月十七日 平成二年度萬緑全国大会を弘前市で開催。二百人。

九月二日 暖鳥運営委員会。解散か継続か。(千空の提案で)新谷ひろしの主宰誌になる。

十月七日 このところ五所川原俳句会は機能を失いつつある。

十一月十二日 「俳壇」一月号の句を自選する。旧作から。情けない。

日本を代表する俳人・成田千空への注目度が高

まり、県外の俳人との交流機会も増えたことは県内の俳人への刺激となりました。地域の文化講演や新聞社の企画協力などを通じた千空の活躍はジャンルを越えた文化活動として捉えることができます。その一方で、地元の俳句会の運営も新たな局面を迎えることになりました。五所川原の俳人からも熱心に勉強をしていました。多忙な千空に代わって実力を蓄えた俳人らが新たな指導者として活動を期待されました。弘前を会場にした萬緑全国大会を成功させる責務もあり、千空は句碑建立を急ぐために自ら積極的に関わらねばなりませんでした。「五所川原俳句会」「暖鳥」といった自身の出発点でもある集団の行く末を案じながら、生活の慌ただしさは年末まで続き、さすがの千空も「情けない」と綴っています。そのなかで、除幕式の祝詞に感銘を受けたという記述が目にとまりました。

ともに歩んだ仲間たち



昭和45年、宮司の家での句会
中央は49歳の千空

六月九日の除幕式を父親である宮司とともに奉仕した私の夫は、亡き宮司の引き出しに残されていた祝詞を読み返し、この日に奏上した祝詞は宮司が特別な思いを込めて作文したようだと教えてくれました。祝詞は願い事をする人

に代わって斎主がご神前で奏上するものですが、その願い事を参列者全員が一緒に聞くことにも大切な意味があるとのことです。若いころから俳句に親しんだ宮司(齋藤吟雨)は五所川原俳句会初期のメンバー達とともに千空の俳句にかける情熱を知るひとりでした。除幕式の祝詞を現代語に訳すと次のような意味になります。

千空句碑竣功祭祝詞(現代語訳)

この場所に建てた句碑の前を祓い清めて注連縄を廻らし神籬を立てお招きする産土大神・大地主大神・石工御祖大神の御前に謹んで申し上げます。

言霊が幸いをもたらすと信じる我が国で、日々句作に誠を尽くし勤しみ努める五所川原俳句会の中でも、成田力、号して千空は若き頃より俳句の道に分け入って四季折々に心を通わせ、思い触れる事等を俳句に吟み取って数々の句集に著してきました。世の人々に聞こえが高い、その著しい業績を讃え、それを放っておけぬと、このたび志篤い人々が相談して成田千空句碑建立の会を作りました。ここを美しく良い場所であると選び、素晴らしき石を運んできてこの庭に積み上げ、大粒の雨ふる青田母のくいの句を寺田石材店の技も麗しく深々と彫り刻んで工事がめでたく竣功しました。そこで、今日を良い日柄と定めてこの会に関わる人々がご神前にうち揃って除幕式を執り行なおうと、種々のお供え物を奉りお願い申し上げます。

今よりゆく先、雨が降り風吹き荒ぶとも地震あるとも、この句碑が動き傾き崩れ損なうこ

とないように、この五所川原を訪れた人々がこの句碑を仰ぎみては俳句の道の奥深さを学び納めて各々の心の糧としてますます俳句の道を深く導かれますようにお守りくださいますよう謹んで申し上げます。

句作の時間もなかなか取れないまま、生活のための仕事と俳人としての重責を担う千空は祝詞のなかに仲間と歩んできた時代と今後の俳句の発展を願う声を聞き留めたのだと思います。永住の地・五所川原に建立された句碑は、新たな世界で力を尽くそうとする千空の決意と覚悟のしるしともなったのです。

紅しだれ吾が句碑はわが墓碑のやう

平成十六年に肺炎のために入院した千空は、『文芸おおもり』第151号で「蘇生―入院前後一五四句」を発表しました。そのなかに自らの句碑を詠んだ一句があります。師弟の句碑を詠んだ俳句はいくつかありますが、自分の句碑への思いが表れた俳句はこの一句のみです。退院後、千空は自宅に近い公園へ出かけて句碑と対面したのでしよう。すっかり萎えた身体に春の日差しを受け、萌え出すような景色に目を細めました。最晩年に向けての日々がはじまりました。

どっしりと地面に下ろされた巨岩は東北の地で俳句を詠み続けた俳人の姿を象徴するかのように見えます。この句碑が俳句を愛する人々の心の糧となるように、千空の功績を伝えていきたいものです。

(千空研究会調査研究員／五所川原市)

私の中の戦争

成田千空

最近、「九条の会」アピールの文書が二ヶ所から送られ、日本の憲法改正の動きが強まって来ていることが実感される。アピールの要点は、戦争放棄と戦力を持たないことを規定した九条を含む憲法制定が、半世紀以上経ったいま、憲法上の拘束が実際上破られ、また、非核三原則や武器輸出禁止などの重要施策を無きものにしようとしている。憲法改正は軍事優先の国家へ向かう道を歩むもので、この転換を許すことができない。日本と世界の平和な未来のために、日本国憲法を守るという一点で手をつなぎ、「改憲」のくわだてを阻むため、一人ひとりができる、あらゆる努力を、いまずぐ始めることを訴える。というもの。アピールの発起人は、井上ひさし、梅原猛、大江健三郎、奥平康弘、小田実、加藤周一、澤池久枝、鶴見俊輔、三木睦子の九人である。

戦争放棄と平和への希いは、十五年戦争を経て、敗戦国となった時代を生きて来た日本人の誰しも願うところであろう。平和憲法の第九条は戦争の教訓から生まれた規定にはかならない。いわゆる戦中派は戦争の体験者であり、私もその一人であ

る。それなら戦争の時代をどう生きたのかということを考えてみる必要がある。

満州事変が起きたのは昭和六年、私は小学校五年生であった。青森の歩兵五連隊が戦場へ向うというので、五年生と六年生はそれを送るために新町通りに並ぶべしという。寒い真夜中であった。行ってみると各小中学校の生徒や一般の人が通りに溢れていた。待つことしばし、新町通りの向うの寺町の方から進軍ラッパが聞こえてきて胸が躍った。嵯峨大隊である。その頃の小学生は五連隊を知っており、連隊長は谷大佐で第三大隊長は嵯峨少佐。その他有未少佐とか相澤大尉とか、今でも覚えている。皆軍国少年であった。沿道からバンザイの声が湧き起り、馬に乗った連隊長や大隊長に続いて、房だけの軍旗、そして銃身を白い布で巻いた兵隊たちの行進に感動した。学校では天皇陛下の写真がある奉安殿を登校のたびに拝むことになっていた。戦争は満州事変から支那事変へと広がり、満州建國や南京攻略など、戦勝の旗行列や提灯行列の日が続いた。

その頃、私には二つの体験があった。一つは昭和十三年に東北、北海道で陸軍の大演習があって、軍隊ばかりではなく、学生も参加することになり、北海道で演習が終わったあと、天皇陛下を迎えて石狩原野で分列行進の儀式があった。私はわが学校の旗手として行進に加わって、はじめて天皇をまのあたりに見た。白馬に乗った天皇が文武百官を従えて姿を現わし、台上で不動の姿勢のまま二時間ほど答礼された。炎天下である。当時の天皇は現人神あまのじんであり、その姿を私は見た。この天皇のた

めに日本の無数の若者が死んだのだ。それは悲しい死であると共に、名譽の死であった。校旗手としてのもう一つの痛烈な体験は、戦場から送還される負傷兵を出迎えることであった。通達があった真夜中に青森駅のホームに整列した。知事や市長や多くの市民が出迎えた。臨時列車から降りてくる負傷兵達の白い包帯や松葉杖が痛々しかった。月日が経つにつれて通達が度重なり、校旗は校長室から旗手の家に保管されるまでになった。寒い日もあって真夜中の集合は辛かったが、負傷兵を通して戦争の激しさが実感された。戦死者の遺骨の出迎えは真昼に行われた。白い骨箱を抱いた兵士の行列が、駅から長々と続いた。

学校は卒業の一年前に軍需工場へ動員され、私は航空計器工場で働いた。自動操縦器や爆弾投下器などが製造され、徹夜の作業が続いた。だが私は二年足らずで肺病になって帰郷した。帰って間もなく咯血した。その半年後の十二月八日に太平洋戦争突入の臨時ニュースが伝えられた。それ以後のニュースの殆どが大本営発表であった。ハワイの真珠湾攻撃、シンガポール攻撃等々。ニュースの前奏に軍艦マーチが鳴ると、勝利のニュースであった。日本が米英という世界の大国を相手に戦い、奮闘していることに興奮を覚えたのは事実であった。

それとは別に私は病と闘いながら文芸の世界へ傾いて行った。二十代に入ったばかりで死病との闘いを強いられ、孤りのさびしい世界へ追い込まれていった。それが文学書に親しむ動因と思われる。読むばかりではなく、作る要求も生まれ、小説や詩や俳句をつくり、結局、人間探求派の俳人

中村草田男に師事するに至った。一方、同人制の青森俳句会に拠った。ここでは吹田孤蓬、宮川翠雨、西沢赤子、千葉青実、新岡青草、その他論客が多く、俳論ばかりではなく、芸術論や文学論に及ぶのが常で、言論統制の時代の自由な発言に耳を傾けることが多かった。どう生きるべきかが人間の根本で、人間が人間を殺す戦争がしだいに悲しく、兄弟や友人達が戦争へ召集されてゆくたびに私はひそかに涙を流した。だが、若し私が召集されたら、決死隊を志願して敵に体当りしようと思っただ。この矛盾は今でも私の心のどこかに潜んでいる。

太平洋戦争も半ばを過ぎて、しだいに日本の敗色が濃くなって行った。昭和二十年七月二十七日に、青森は大空襲を受けた。その日の夜、青森俳句会の句会があった。句会の最中に、空襲警報のサイレンが鳴りひびき解散した。黒い爆撃機の大群が青森を襲い、焼夷弾の雨を降らせた。二時間ほどの空襲で青森市の大半が焼け、七百人余りの死者と三千人余りの負傷者が出た。私の戦争体験の頂点である。戦争の地獄を見てしまったのである。

炎帝よのけぞりにこの焦げ死体
灼けつく道何につながる全焦土
草の穂と余燼まみれの一家族

〈なりましたせんくう／俳人・「萬緑」代表／五所川原市在住〉

千空 酒の俳句

千空さんは酒好きだった。盃を手にしたときの笑顔は忘れがたい。もともと酒好きの家系だったようだ。

松三日酒系家族といひつべし

朝酒をゆるし在はさむ盆の父

岩魚酒父よりの血のしたたかに

晩年は酒を断ちがたかったよう、『文芸あおもり』の千空対談でも、「酒が入れば滑らかにいく」と言って、銚子を前に盃を傾けながら対談していた。

日中、原稿を書きながらもチビリチビリやっていたようで、机の下から酒瓶が出てきた。市子夫人が「アル中にならないか」と心配していた時期がある。本人も気にしていたようで、『未来』180号（萬緑県支部誌）に次のような句があった。

かくし酒神に見つかり北吹けり

千空さんは田植えの手伝いに行ったり、佞武多好きでもあったから、さなぶり酒、佞武多酒は付き物だった。それに盆、正月と来れば酒とは縁の切れるときがない。

夫人間何が無くても熱爛を

である。

今回は、酒の俳句を並べてみた。

【あ行】

相酌むに西日の重さ佐渡の方
青林檎あだに明るき酔余の燈
茜さし君がなさけの山桜桃酒
秋ふかき酒の肴に蛸の疣

朝酒をゆるし在はさむ盆の父
熱き酒座敷傾くまでのみぬ

熱爛も汝が大き掌も忘れぬや
熱爛や海の万波を戸にとざし

焙るらるる冬禽の形酔ひ痴しや
あられなくさなぶり酒の踊かな

新走り市井に老いて悔いもなし
泡盛にアルプスの水旅の夜は

居酒屋を出て忘年の風まどふ
一月の色に出でたる山桜桃酒

一合二合の酒の夜寒かな
一合の二合の酒に露の味噌

一合の二合の酒の盆冥加
岩魚酒父よりの血のしたたかに

うつそ身の酔ひが眠りへ雪の国
馬市に酔って誰彼恋しさう

馬の市酔ひどれ哀歌くりかへす

【か行】

かくし酒神に見つかり北吹けり
果実酒の琥珀の澄みも土用入
かまくらの甘酒すすり子にかへる
亀鳴くや一升瓶に手が伸びる

黄色の西日うつけに酔ふ中年
吟醸に伊勢の塩あり日の盛り

吟醸を葉とおもふ寒九郎
草花や酔うていととき仏たち

小蝦のみが網に焼酎焼けの鼻
隠り沼のやうな酒蔵小見世みち

【さ行】

冴え返る地下に赤き燈強き酒
酒ありて夏草に置くふくらほぎ
酒一斗さなぶりの虫昇天す
酒酌みし思ひの数の落葉かな
酒滲みて音の決まりしねぶた笛
酒といふ良き友ありみどりの夜
酒のめば耳たばに蚊の寄りくる
酒は毒か薬か知らず望の月
さなぶりの晴を分たむ酒肴
死の家の火と酒に酔ふ農の血や
焼酎の強さは甘さ太宰の忌
焼酎の湯割りほのぼの浅草に
新酒あり君が墓標の黒光り
寸酌に妻が手塩の氷頭膾
生あらば彼岸日なかの酒ほがひ
背筋ふかき酒房の女雪凍みつく
夫人間何が無くても熱爛を

【た行】

濁酒呑むや沖の夕日は火の車
濁酒や裏山は濃き闇醸もす
濁酒呑んで太平洋の男ども
たつきの幅に羽ばたく日玉子酒
妻るねば夜は旅のごと冷し酒
怒語に代る酔談さむざむ残置燈
年越すや山の葡萄を酒として
年忘れ手に円光の茶碗酒
友垣の中のやすらぎ諸焼酎

鶏合わせ激しき後の酒となる

【な行】

なかぞらはびいどろの青今年酒
薺片々二合の酒に酔ふよき友
薺片々二合の酒に酔ひしれつ
海鼠あり津軽の辛き地酒あり
にがり酒西津軽の友ら手大きく
にがり酒己が重みに沈む陽や
西日より酒提げてくる出羽の人
佞武多酒酌むや地べたの寧ぎに
呑めて呑む酒ありがたや盆の家

【は行】

八幡宮の裏山の鬱の甘酒屋
花に酔ひすこし荒れたるをんなかな
母健か灯色渦なす玉子酒
春を惜しみ君を惜しみて酌まんな
ひとくちの酒の身にしむ母郷かな
ひとつまみ塩あれば足る新酒かな
ビールビールの酔もはやすっかり母にとほし
ビール呑む僧形にした大あぐら
火の国の諸焼酎をよばれをり
冬鳥の潜み音酒肴受くべきや
冬の鼻紅蓮とし酔ふつらい奴
釦一つ欠きしオーバー宿酔ぶつぽり

【ま行】

松三日酒系家族といひつべし
みすず刈る信濃の地酒身に入むよ
みすずかる信濃の地酒夜長の灯
麦の秋中身が酒みきのよき土瓶

麦の酒諸の酒よき肥後の秋
喪の家の火と酒に酔ふ農の血や

【や行】

闇を醸もす太古のこだま・濁り酒
夕なかなか空脛のぞく酒のれん
行春や雀いろどきひとり酒
雪に酔ひ説き伏せられて行くごとし
雪の予気祈りと祝いわぎの杯を乾す
ゆく春の雨の滂沱と酒佛
酔ひ荒き友もなつかし霧笛の夜
酔ひざめの置いちめん枯野いろ
酔うて皆羅漢貌なり霧笛の夜
酔ひすでに藁塚より冥くらむ貌一つ
夜寒なほ甲斐のぶだうの赤き酒
夜を醸もす太鼓のこだま・濁り酒

【ら行】

流水の陶酔まろむ雪の線せん
流灯の赤きを海に酒ほがひ
炉火赤々と梵貝の通夜酒

【わ行】

わが酒をすこし妻のみ十二月
我はわれ塩を魚に冷やし酒

青森文芸ブックレット（定価は税込み）

中村草田男訪問記 成田千空 500円

千空句帖 文学で青森を応援する会編 1080円

わが心の〈千空〉 俳人成田千空研究会編 940円

『陸奥新報』が社説で論評

成田千空評伝

「風土の俳人」再評価の集大成

本県俳壇の中心的存在であったのみならず、全国俳壇で「東北に千空あり」とうたわれた成田千空（1921～2007年）に関する評伝「成田千空伝―大粒の雨降る青田母のくに―」と、千空の句集を1冊にまとめた「合本 成田千空句集」が刊行された。発行日はともに3月31日。千空の98回目の生誕日に当たる。かつて千空に学び、今なお慕う人は、思いも新たに両書を手にしたに違いない。

千空の没後10年余りを経て刊行された評伝は、千空を知らない読者にもその生涯と事績を分かりやすく伝えてくれる。読者によっては、10代の寺山修司との交流と寺山俳句の評価、太宰治への敬慕と傾倒ぶりに目を見張るだろう。

千空が終生の地とした五所川原の文芸史にも行を割き、文化的土壌と戦後の社会復興を背景に「地元」の文芸運動に俳人・成田千空は必要とされました」との指摘は見落とせない。千空の評価は津軽の風土が重視されがちだったともいうが、庶民としての生活に根差した句作に貫かれていた揺るぎない普遍性にも気付かされる。

評伝を著した齋藤美穂さんは元県近代文学館解説員で、民間団体「俳人 成田千空研究会」（佐々木達司代表）の調査研究員。2017年に本紙連載「永住の地・五所川原の千空さん」も執筆している。合本は同研究会が編集に当たった。

千空研究会は、14年に近代文学館で開催された没後初の本格的な回顧展「成田千空」をきっかけに発足した。資料収集と、ゆかりの人物への取材を進め、その成果を季刊の会報「千空研究」で発表してきた。会員は今年2月現在で県内外の64人。顔触れは文芸関係者のみならず画家、写真家など多彩で、千空の地元文化人との交流の幅広さを印象付ける。評伝と合本の刊行も、発足当初から主要事業に掲げていた。

評伝では、近代文学館の回顧展が没後10年へ向けた千空再評価の機運を高めた―と指摘しているが、再評価の核となったのが千空研究会の活動であることは疑いない。

著者は、「時代の推移やジャンルの新化とともに」千空の研究がさらに進むことを願っている。著者にとって評伝は再評価の「一里塚」かもしれないが、少なくとも現時点ではその集大成と位置付けたい。

評伝と合本の刊行を果たした同研究会は、会報の発行を、今年11月に予定している第20号で終わらせる予定だ。佐々木代表は、会報が今後の研究の資料として役立てられることに期待を寄せる。

作品や人物像は、その時々々の視点や知見で照らすことにより、新たな側面や魅力が浮かび上がる。その担い手が誰であれ、不断の取り組みが先人の功績をより多面的かつ豊かな形で顕彰することにつながるだろう。（陸奥新報 2019年5月6日）

* ネットでも閲覧できます。

齋藤美穂『成田千空伝』書評

陸奥新報（5月15日付）新刊紹介

「足跡と姿勢 隈無く描写」草野力丸

『成田千空伝 ―大粒の雨降る青田母のくに―』

齋藤美穂

『合本 成田千空句集』

俳人 成田千空研究会編

出版記念会の予告

とき・7月28日(日) 午後2時 受付

2時半 開催

5時 お開き

ところ・アラスカ(青森市新町)

青森市新町1丁目11・22

電話：017・723・2233

会費・5000円

評伝の著者・齋藤美穂さん

成田千空夫人・市子さん

を招いて行います。

主催 あおもり文芸さろん

代表 櫻庭利弘

事務局 野沢省悟

* 千空研究会会員・あおもり文芸さろん会員には後日案内状を差し上げます。

* 希望者はどなたでも参加できますが、事前にお申し込みが必要です。

(電話 0173・35・5323 文芸印刷)

東奥日報（5月20日付）郷土の一冊

「今にも現れそうな錯覚」館田勝弘

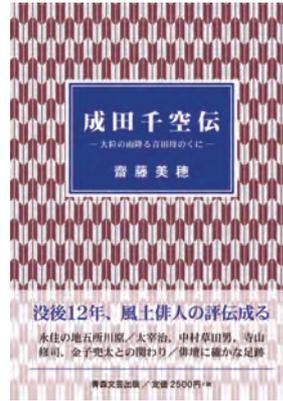
成田千空伝

—大粒の雨降る青田母のくに—

齋藤 美穂

没後12年、風土俳人の評伝成る

永住の地五所川原／太宰治、中村草田男、寺山修司、金子兜太との関わり／俳壇に確かな足跡



東北に

千空あり

A5判
261ページ
2500円＋税

合本 成田千空句集

俳人 成田千空研究会編

蛇笏賞受賞俳人の句集を1冊に

「地霊」「人日」「天門」「白光」「忘年」「十方吟」と没年の作品、3000句あまりを収録



6句集と没年の作品、総索引付き

A5判
262ページ
2500円＋税

『成田千空伝』の反響

○ 『成田千空伝』のご出版おめでとうございませう。関係者のお慶びはいかほどかと拝察します。早速句会のメンバーに紹介して注文を取ります。既に過半のメンバーが千空を知らず、又、高令者は終活整理中ですので見通しは不明です。地元にも俳句にも距離を置いた書きっぷりが魅力的です。これをベースに千空研究が進み、いろいろな本が出版されるでしょう。その魁の貴重な一書です。

(千葉県 F志さん)

○ 本日、『成田千空伝』、『合本成田千空句集』を拝掌いたしました。無事、完成おめでとうございませう。

行き届いた本作り、当然といえば、当然なのでしょうが、やはりさすが、です。

しっかりとした仕事を積み上げられて羨ましいです。立派な、そして今、求められている地域文化の再顕彰の書物にもなっていると思えます。

(東京都 Kさん)

○ 著者が足で実にもママにコツコツと集められた貴重な資料や聞き書きをもとに、関係した人々を紡ぎ出し深さと広がりのある織物のような、立派な伝記に仕上げられましたことに心から敬意を表し、またお慶び申し上げます。同時に、五所川原の文化史の記録としても、深さも巾もある資料として後世に残るものと思料いたします。

(五所川原市 Mさん)

○ 『成田千空伝』を「生涯の師 中村草田男」の章から読み始めましたが、父との千空さんの関係も千空さんと相手の人々との人間性の一番深いところで交流を軸に生き生きと捉えた、素晴らしい評伝となっていると思いました。

(東京都 Nさん)

日本現代詩歌文学館は、
全国で唯一の詩歌専門の総合文学館です。
日本の明治以降の詩歌資料を
有名無名にかかわらず収集・保存し、
様々な活動をとおして
詩歌の現在を発信しています。

【短歌部門】
小島ゆかり
『六六魚』(未阿弥書店)

【俳句部門】
三村純也
『一はじめ』
(角川文化振興財団)

【詩部門】
和田まさ子
『軸足をすらすら』(思潮社)

第34回詩歌文学館賞

平成31年度／新元号元年度賞状
平成の詩歌人たち
—響きあうことば—

平成に没した、そして生まれた多くの詩歌人たち。
両者の遺著作品を一堂に展示しています。
(新元号2年3月15日まで)

◆◆◆
主なイベント開催予定
こどもの俳句教室 6月～10月
こどもの詩のワークショップ 8月
短歌入門講座 9月
俳句基礎講座 9月～10月
短歌実作講座 9月～11月
第6回現代歌人の集い 10月
第16回俳句まつり 11月
古典文学講座 11月～12月
俳句実作講座 1月～3月

日本現代詩歌文学館

024-8503 岩手県北上市本石町2-5-60 Tel 0197-65-1728 Fax 0197-64-3621
URL <https://www.shiikabun.jp> E-mail shiika@shiikabun.jp

[開館時間] 9時から17時
[休館日] 12月から3月までの月曜日および年末年始
[入館料] 無料

寄贈感謝

浅利康衛さん(青森市) 『まほろば』3・4・5月号
鎌田義正さん(弘前市) 千空資料写真
木村直美さん(弘前市) 千空資料写真
工藤清泰さん(つがる市) 千空資料新聞コピー
小池淳一さん(東京都) 寄付金

原稿を募集しています 第20号で終刊となります

会報『千空研究』の原稿を募集しています。
執筆頂ける方はお早めに原稿をお届けくださるようお願いいたします。

1. 調査・研究に関するもの(4000字以内)
 2. 回想の成田千空(2000字以内)
- 締め切り 第19号は7月末、到着順に掲載します。
送り先 (下段発行所、青森文芸出版あて)

*Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

会費領収しました(第17号以降、敬称略)

浅利康衛、阿保子星、荒関映子、荒谷信子、石崎志亥、泉 風信子、市田由紀子、一戸 鈴、槽谷雅枝、鎌田義正、上條勝芳、木村玲子、櫛引麗子、工藤清泰、小泉光子、後藤 隆、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、佐藤 繁、佐藤陽子、寺門資子、瀬川君雄、高井まさ江、高橋睦子、館田勝弘、土田紫翠、外崎文夫、中嶋義雄、中村雅之、永山憲子、奈良知治、成田市子、成田圭子、仁科源一、野沢省悟、野村正彦、浜田十三、米田省三、三上弘之、浜田しげる、未津きみ、山内ひろ子、山本こう女、吉田州花

会員名簿(64名)

〈青森市〉 浅利康衛、荒谷信子、齋藤光子、佐藤陽子、高森ましら、中嶋義雄、成田市子、西谷ともえ、野沢省悟、野村正彦、浜田しげる、未津きみ、吉田州花
〈弘前市〉 阿保子星、石崎志亥、泉 風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤 隆、佐藤 繁、館田勝弘、土田紫翠、成田圭子、三上弘之
〈黒石市〉 鳴海顔回
〈藤崎町〉 清水雪江、世良 啓
〈八戸市〉 上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次
〈十和田市〉 米田省三
〈五所川原市〉 会津明郎、荒関映子、一戸 鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、浜田十三、松宮梗子、山内ひろ子
〈板柳町〉 木村玲子
〈中泊町〉 外崎文夫
〈つがる市〉 兼平一子、工藤清泰、中村雅之
〈深浦町〉 草野力丸、山本こう女
〈岩手県盛岡市〉 瀬川君雄
〈茨城県那珂市〉 永山憲子、寺門資子、矢須恵由
〈茨城県水戸市〉 槽谷雅枝、小泉光子
〈茨城県日立市〉 高井まさ江
〈千葉県流山市〉 藤埜まさ志
〈神奈川県横浜市〉 許勢元貞
〈大阪市〉 川東郁代

☆北極星☆

○ようやく『成田千空伝』と『合本成田千空句集』が完成しました。ご協力ありがとうございました。陸奥新報が社説のほか、同紙新刊紹介、東奥日報、郷土の一冊でも取り上げていただきました。また、うれしい便りが寄せられ、励まされています。

○「資料再録」は「私の中の戦争」を取り上げてみました。少し違和感もあるかも知れませんが、千空俳句は戦争の地獄から出発していることも事実です。千空さんは、いつも平和への思いを熱く語っていました。

○前号、「雪の俳句」が好評だったので、「酒の俳句」をまとめてみました。季語を横断して酒にまつわる句を五十音順に並べました。酒好きの千空らしい句も多いと思いますが、いかがでしょうか。今後は「佞武多の俳句」「白鳥の俳句」を考えています。

○木村直美さんから「千空さん『津軽のふるさと』を歌う」(2次)が寄せられました。世良啓さんの「千空先生に俳句を習う」(4次)にも、教室の忘年会で、「千空さんが好きだという美空ひばりの歌『津軽のふるさと』を全員で歌ったりした」とあります。出版記念会で熱唱した千空さんの笑顔を思い出しました。

2019年5月20日発行
会報『千空研究』第18号 非売品(会員配布)

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-35-5323
FAX 0173-35-8414